主張

魅力ある産業をめざし

金属労協副議長／全電線中央執行委員長　佐藤裕二

厳しい時代の変遷のなかで

全電線は、電線および関連産業で働く労働者により組織された産業別労働組合であります。

戦後の荒廃から間もない昭和21（1946）年7月2日に、同一産業に働く仲間の大同団結と労働条件の改善をめざし、23組合・1・2万人で産業別組織として全国で18番目に結成されて以降、組織としての礎が築かれてきました。

70年を超える長い歴史のなかには、戦後の復興期から高度成長期、バブル経済崩壊後の長期景気低迷した変革期や金融危機による世界同時不況などがありました。近年の新型コロナウイルス感染症への対応もそうですが、それぞれの時代において数知れぬ苦難と幾多の試練が運動の歴史に刻み込まれ、3年後には結成80年を迎えます。そんな全電線の組織人員は、1960年代から増加し、1970年代から1990年代の後期にかけ4万人を超える組合員で構成していました。しかし、企業間の合併やアライアンスなどを通じた事業見直しなどの構造改革等を経るなかで、組合員数も徐々に減少し、現在の組合員数は約2・5万人となっています。しかし、全電線が組織結成以降、70年以上産別として発展してこられたのは、厳しい時代の変遷のなかで全電線運動の前進と組織の強化・発展を求めて運動を進めてこられた、諸先輩方の並々ならぬご苦労によるものであることは言うまでもありません。

今まさに直面している、ロシアのウクライナ侵攻の影響や悪化する中東情勢、物価上昇による生活への圧迫、そして、DXやGXの進展などによる大変革期を乗り越え、しっかりとした組織や運動を次代につないでいくこと、それが私たち現役役員の使命であると考えています。

11月18日は電線の日

我々の産業で製造している電線は、電気を送電する電力用や音声・画像・映像などの情報を伝送する通信用など、様々な用途であらゆる場所に張り巡らされており、日常の生活や産業・経済に欠くことのできない社会インフラを支える重要な役割を果たしています。人間の体にたとえると、社会にとっての血管や神経に相当し、社会生活の向上、産業の発展、文化の向上に大きく貢献しています。

一方で、電線は街を歩いていると目にすることはあると思いますし、車や様々な電子機器などにも使われているので身近にはあるのですが、一般のユーザーが電線自体に直接手触れる機会はそれほどなく、気に留めることも少ないのではないかと思います。

そのような状況にあることなどから、便利で豊かな毎日を支える安心安全な電線の製造と安定供給に携わるすべての人々を応援し、使う人の多くが気付くことの少ない身近な電線に目を向けてもらうための日として、日本電線工業会が、創立70年を迎えた2018年に周年事業の一つとして、11月18日を電線の日と制定しました。11月18日を数字で並べると「1118」となりますが、

111は様々な電線の種類を表しており、8はあらゆるものにつながる無限大を表しています。業界のイメージアップを図り、多くの人に電線というものに興味を持ってもらうと共に、将来の電線産業を担うであろう人材に目を向けてもらう目的としても、日本電線工業会が力を入れている内容でもあります。

今回の寄稿もそうですが、全電線としても、幅広く電線をアピールするとともに、産業・企業の魅力を高めるために様々な発信をしていきたいと考えています。

産業の将来を担う人材

「人材の確保」これは、全電線だけではなく、労働人口が絶対的に不足するなかで、多くの企業が悩まされている問題なのではないかと思います。

「人材」は、産業・企業を支える重要な要素だと考えます。製品をつくるにも、販売するにも、そしてサービスを提供するにも、それを担当する人がいなくては、ものづくりの一連のサイクルは成り立ちません。単純に、人手があればなんとかなると言えるかもしれませんが、人手は「働く人」「働き手」のことを示す一方、人材は「才知ある人物、役に立つ人物」という意味を持ちます。つまり、人手不足は単に「労働者の数が足りていない」状態であることに対して、人材不足は「企業のなかでスキルや技術を有した労働者が足りていない」ということになります。

日本の根幹であるものづくりを支える産業の人材の確保は大きな課題でもあり、JCMの「2023年闘争の評価と課題」においても、金属産業を取り巻く課題として、「生産年齢人口の減少が続き、コロナ禍から社会の正常化が進む中、人材獲得競争が激化している。経済安全保障の観点から、金属産業の国内回帰が進められているが、DXやカーボンニュートラルに対応し、変革をリードする高度人材とともに、生産現場を支える人材についても、確保が困難となっており、人材の流出も続いている。2023年闘争では、他産業においても賃上げの動きが加速しており、金属産業においても産業・企業の魅力を高めていかなければならない。」とのまとめをしています。

人材獲得競争が激化する中、人材の確保・定着はバリューチェーンの存続にかかわる課題となっており、金属産業の存続を図り、日本経済の屋台骨として、将来にわたりけん引していくためにも、産業・企業の魅力を高めていくことは重要な取り組みになっています。そのためには、「人への投資」を強化し、賃金をはじめとした労働諸条件の向上は勿論のこと、ものづくりの面白さ、奥深さも広く社会に発信していかなければならないと思います。

未来社会も人と人とつないでいけるように

全電線各単組の役員は勿論のことですが、全電線に集う組合員も『未来社会をつなぐのは私たちだ！』電線というインフラ整備を通じて社会貢献しているという自信と誇りを持ち、迎える変化に果敢に挑戦していかなければ、この大変革の時代を乗り越えることはできない。」と常々発信をしています。

全電線は、JCM5産別のなかでは小さな組織ですが、人と人とのつながりも大切にするなかで、「山椒は小粒でもぴりりと辛い」そんな魅力ある産別をめざしていきたいと思います。

そして、金属産業に携わる人々が誇りを持って業務にあたり、活力を持って毎日を幸せに過ごせるように。ともに頑張りましょう。

金属労協副議長／全電線中央執行委員長

佐藤 裕二 さとう・ゆうじ

1969年 12月生まれ
1988年 4月　住友電気工業株式会社入社
2005年 9月　住友電工労組 横浜支部執行委員
2008年 9月　住友電工労組 横浜支部書記長
2010年 9月　復職
2014年 8月　全電線 中央副書記長
2016年 8月　全電線 中央書記長
2020年 8月　全電線 中央執行委員長（現）
〃　9月　金属労協 副議長（現）